

編集後記

「語研ニュース」第14号をお届けします。

2005年も残りわずかとなりました。今年、出版界で話題になったことのひとつに、フランスの作家サン＝テグジュペリの童話『星の王子さま』の新訳本が続々と出されたことがあります。これは作者の死後50年が経ち、版權が切れて自由に翻訳出版ができるようになったためです。

『星の王子さま』は、1941年からアメリカに亡命していたサン＝テグジュペリが出版社の求めに応じて書いた大人向けの童話（著者自身による挿し絵入り）で、1943年にまずアメリカで英語版が出版され、作者の死後1945年にフランスで仏語版が出されました。この作品の原題は英語版が *The Little Prince*、仏語版が *Le Petit Prince* で、直訳すると『小さな王子』です。日本では、故・内藤濯先生による独創的なタイトル名『星の王子さま』で親しまれてきました。この内藤訳（岩波書店刊）を読んだことのある人も多いかと思いません。

今回の新訳ラッシュでは、タイトルがどう訳されるかが注目されたことのひとつです。結局、『星の王子さま』を踏襲したものが過半数で、原題を直訳した『小さな王子さま』と『小さな王子』が1点ずつ、原題をカタカナ表記した『プチ・フランス』が1点となりました（2005年12月4日現在）。

本文については、新訳が内藤訳をどう乗り越えているかが注目されるところです。たとえば、王子とキツネの対話で、キツネが *apprivoiser* とは *créer des liens* することだと説明する場面があります。この個所はこの童話の中でもっとも難解な一節とされており、内藤訳では「飼いならす」ことは「仲良くなる」ことだと訳されています。この部分をどう処理するかは訳者の解釈と日本語力が試されるところです。

この冬休みに、いくつかの訳書を読み比べてみるのも面白いかもしれません。参考のために、今年出された新訳本を以下に列挙しておきます。

池沢夏樹訳『星の王子さま』集英社（単行本と文庫本の両方がある）、倉橋由美子訳『星の王子さま』宝島社、山崎庸一郎訳『小さな王子さま』みすず書房、三野博司訳『星の王子さま』論創社、川上勉・甘樂美登利訳『プチ・フランス——新訳 星の王子さま』グラフ社（仏語原文も収録）、小島俊明訳『新訳 星の王子さま』中央公論新社、藤田尊潮訳『小さな王子——新訳 星の王子さま』八坂書房、辛酸なめこ訳『「新」訳 星の王子さま』コアマガジン（訳者は漫画家で、挿し絵は訳者による）。 (M.T.)